

## 「考ハンセン病」

沖縄県・名護市立羽地中学校 3年  
宇良 樹希（うら たつき）

人権とは、人が生まれながらにもっている権利のことである。人間は、自由であり平等だ。その命や人格は決して侵されてはならない。

ハンセン病——。僕が初めてこの言葉を聞いたのは、小学校六年の頃である。母と一緒に古宇利島にドライブに行った時に母から聞いた言葉だった。「ここに愛楽園があるよ。そこにはハンセン病患者がいるんだよ。」と軽く笑って説明してくれた。その時の僕は「ハンセン病ってどんな病気なんだろう。どんな人がこの病気にかかるのだろう。」とただ単純に思うだけだった。その疑問を口にして、母に問うこともなくその話を軽く受け流してしまった。

しかし、その後再び僕はハンセン病について知ることのできる機会に恵まれた。それは、ハンセン病をテーマにした中学生や高校生、一般の人達が演じていた演劇会への誘いだった。内容はハンセン病にかかった一人の少女の物語だった。

少女は、毎日を明るく元気に過ごしていた。ところがそんなある日、学校で身体検査があり、ハンセン病に感染していることがわかった。その日以来、その少女の家族は、友達や近所の人達から石や物を投げつけられ、家が真っ白になるまで殺菌され、あげくの果ては家まで燃やされてしまった。家族と引き離され一人で愛楽園に連れて行かれたその少女は、そこでもひどい仕打ちをうけた。愛楽園にある学校の先生に「近づくな。病気が移るだろ。」と、冷たい言葉をあびせられたり、家族と連絡が全くとれなかったりと本当に心が痛む物語だった。

演劇会終了後、多くの観客が目に涙を浮かべていた。帰りの車の中で母は、「ハンセン病という病気は、今はすぐに治る病気だけど、昔の人はとても辛い思いをしていたんだよ。」と語ってくれた。その言葉は静かだがなぜか僕の心に残った。

しかし、この時はまだハンセン病患者やその家族は、悲しい思いをしていたんだなと思うぐらいで、どこか他人ごとのようにとらえていた。

僕がハンセン病について真剣に考えるようになったのは、中学二年の総合学

習がきっかけだった。その学習では、元ハンセン病患者だったお年寄りの男性の講演を聞いたり、愛楽園の施設を見学したりした。講演会では、発症してすぐに強制的に愛楽園に連れて行かれたことや、脱走者は小さな小屋に入れられ食事は一日一食という罰があったこと、愛楽園に入口はあっても出口は無い、つまり死ぬまで外に出られなかったことなど、以前見た舞台劇以上の恐ろしさや、悲惨さを感じるものだった。施設見学では、愛楽園が建てられる以前に住む場所を追われた患者達がやっとの思いで辿り着いた岩だらけの砂浜や、一つの建物でありながら患者の利用する有菌室と職員達の利用する無菌室に仕切られている状況などを見て回った。

その中で、僕が一番心に残ったのは男の人は子供を作れることを許されず、性器を切断されたこと、女の人は赤ちゃんができて産まれる前に子宮から取り上げられたり、仮に産まれてきても産声を上げる前に顔を水につけて殺されてしまったりという残酷な事実があったということだ。ハンセン病というだけで、周囲の人々の無知、誤解、偏見、差別、無慈悲の鎖に縛りつけられ人間としての存在を全て否定されてしまったのだ。そんなことは、決してあってはならないことだ。

最近、その思いを強くする出来事があった。それは、僕がハンセン病のことを家で話題にしたときだ。「昔、私のおじいちゃん、あなたのひいおじいちゃんもハンセン病だった。」と母が静かに言ったのだ。僕は驚きのあまり言葉を失った。生まれてからこれまで一度も聞いたことがなかったからだ。「おじいちゃんは手の指がだんだん壊死して無くなっていった。そして、愛楽園に行きたきり二度と戻って来られなかった。」と母は怒りをにじませた声で続けた。僕の脳裏に、あの演劇会や総合学習のことが次々に浮かんできた。もしかしたら母の家族も同じような苦しみを受けてきたのではないか。母はなぜその事を黙っていたのか。子供の僕にも言えない程の辛さがあったのだろうか。僕は初めてハンセン病を自分のこととして受けとめることができた。ハンセン病に関する問題についてこれまでにない程の憤りと情けなさを感じた。

ハンセン病という悲劇は決して消えることのない事実である。それを作り出したのは、僕達と同じ人間である。だから僕達が真実を受けとめ理解する必要がある。二度とこの悲劇を繰り返さない為にも差別のない国を、優しさのあふれる助け合いの国を築きあげたい。未来を担う僕達には重い責任があるのだから。